円空（一心）

小澤協夫

円空

円　空（一心）

定価 950 円

昭和 49 年 11 月 30 日　印刷
昭和 49 年 12 月 10 日　発売

著　者　小　沢　協　央
発行者　鈴　木　重　雄
印刷・長　塚　印　刷
製本・河　上　製　本
発行所　け　い　せ　い
東京都千代田区麹町　4—5
第 7 麹町ビル　〒番号 102
電話 263—5921（代表）
振替　東　京　8 4 2 7 9

© 小　沢　協　央

(一)

山が鳴る。地が鳴る。

飛騨の山奥では、空を見上げた樵夫が、嵐になる前に早く山を下りなければと思っていた。山に籠っている山伏達も、呪文をとなえ、嵐を柔げようとしていた。禅寺の和尚もまた、こりゃ、ひと荒れくるわいと思っていた。

宿場女郎達は、うら寂れたこの宿場にも、嵐にでもなれば、泊る客も増えるだろうと、あわてて鬢を直し、化粧に精を出し始めていた。

江戸寛永初期。三代将軍徳川家光の治政であった。父、秀忠は、まだ大御所として、隠然たる権力を持っていたので、三代将軍とはいいながら、家光は、独自の政策を打出すまでには至らなかった。家光は、自分自身を、二代将軍と称していたといわれる程、父より、祖父家康に愛情を抱いていた。というのは、幼少の頃、父が、弟の忠長を愛し、将軍の職を譲りたがっていた事を知っていたので家光には父に対する不信があった。祖父家康の一言により、将軍になれたという事から、家康に対する信頼は、一そう増すこととなり、その両者が、家光の心の中に、複雑な葛藤となって渦巻いていたと

思われる。それは、寛永九年（一六三二）秀忠が死ぬと、今まで、鬱積していた念が、爆発したかのように、武家諸法度を改定し、身分制度を固め、鎖国を進める等、独自の政策を、はっきり打出したことからも判る。

その様な状況の中で人々の生活も、士農工商の鋳型の中にはめこまれていこうとしていた。

此処、美濃の国（現在の岐阜県）は、関東から京へ達する道の中間に位置する為に、源平、墨俣川の合戦（一一八一）、承久の合戦（一二二一）そして、関ヶ原の合戦等、しばしば戦場と化していた。

また、木曽、長良、揖斐の三大河川とその支流が、網の目のようにかこみ、殆んど毎年のように、洪水に襲われていた。江戸時代においても、慶長から宝歴迄の約百五十年間に、百十回余の大洪水があったという。

勿論、水の猛威の間に間に唯、流されていたというばかりではなく、それなりの治水工事はなされてはいたのだ。川の流れを、堤防の中に囲まってしまうという工法ではなくて、田畑や村落の重要な場所のみを、村々が共同して堤防で囲む方法、或は、水の流れを変えたりするやり方であった。

その様な集落のことを輪中という。兵法にも、輪中というのがあるが、これも敵を誘いこみ、とり囲むことを指すが、水流を、堤防により変え、取囲むという輪中地帯と酷似しているところから、そう呼ばれたのかもしれない。この様な場合、多くは、耕地が堤防より低く、輪中の中に住む人達にとっては、堤防は生命がけで守らねばならないものであった。

木曽川と長良川にはさまり、その支流、逆川、足近川にそって、正木輪中、足近輪中がある。水呑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

百姓の、みの八とお種夫婦の住む、美濃国竹ヶ鼻（岐阜県羽島市竹ヶ鼻）は、それらの輪中の対岸、乗原輪中にあった。

竹ヶ鼻は、戦国時代・竹腰伊豆守直隆が、城を築いていて、城下町として賑わっていたのだが、秀吉攻略の後は、今では、わずかに城跡のみを残しているに過ぎない。

乗原輪中の外には、他の輪中地帯と同じく、堤防に守られていない水呑百姓達の新田があった。石高の多い本百姓達は、自分達の土地を、輪中の中に持っていて、ある程度は、水害から免がれることが出来るのだが、自分達の土地を持たない水呑百姓や、食扶のない本百姓の二男三男は、輪中の堤防外の、放置された土地を耕すしかない。

それらの土地は、肥沃であるのだが、洪水にあったらひとたまりもないことから、危険な土地として放置されているのであった、確かに、大自然の猛威に、素手で立向うに等しいこの新田開拓は、無謀と言えば言えるだろう。だが、一夜の嵐により流されてしまう田畑であることが判っていても、肥沃な土地であり、うまくいけば、相当量の余剰収穫を上げられる事もあり、大洪水になれば、輪中内の田畑の多くも、流されてしまうこともあって、彼等は、競って耕作を続けていたのである。

また、それ以上に、切実な彼等の問題は、封建制の身分制度で、がんじがらめにされた社会に、もしかしたら、借地ではなく、自分の土地として払下げられるかもしれないという一抹の期待が、彼等にそれを耕やさせ、そして唯一の救いともなっていたのである。

みの八夫婦も、そんな百姓達の仲間であった。

みの八の家は元来上中島村にあったのだが、新田開拓の為に、竹ヶ鼻の新田の内に移されていた。家というより小屋であった。すごい荒屋であった。この地方には、洪水の為に、水屋という避難小屋を平地に作っておく。数メートル盛土をして、その周囲を石で固め、その上に小屋をたてる。簡単に寝泊り出来る最少の設備しかない。みの八の家は、その水屋を改造した、見窄らしいものであった。

「お種、今年は、楽させてやるで。」

額の汗を拭いながら、こう言ったものの、みの八には、自信がなかった。側で、汗して働らく女房のお種も、その様な事は、百も承知だ。ただ、夫が、自分の事を案じてくれることがうれしい。

「ほうだ。ほら、あの稲のあんべえを見るといいで。きっと今年は豊作じゃ。」

と、答えるお種であった。それを聞いた、仲間の百姓の一人の安兵衛が

「今年は、どんだけとれるじゃろうかのう、おたね。」

と、言った。

「ほうじゃねえ。目一杯取れれば、おら等にとっちゃ、豊作じゃ。」

お種が、目一杯と言ったのは、反当りの米の収穫量が、一石二斗ということである。

「庄屋さまは、米を、四俵だけもらえばええと、いいなさるよって、目一杯なら、七俵以上になるのう。」

と、安兵衛は、もう取入れも終って、米を手にした時のように、目を輝やかせて言った。そんな安兵衛に、水をさすかのように、みの八は、

「ほうじゃがのう、この新田じゃ、いつ水にやられるか判らん。平らにすりゃ、一反、七斗か八斗しかならんちゅうに、今年、一石二斗でも、来年は、水で駄目になるかもしれんからのう。天の助けにすがるしかないのう。」

と、自信なげに言った。

実際、この様に不安定な新田では、収穫量の予定は、全くたたないが、検地では、地味豊かなところだから、水に流されなければ、反当り、一石二斗と決められていた。だがこれも実に、曖昧なものなのであった。

みの八の言う通り、平均したら、水害で、みの八や安兵衛の耕す三反強の土地からは、米四俵と一斗、もしくは二斗程になってしまう。種籾(たねもみ)を、反当り、一升から一升五合とり、他の百姓の年貢の不足量を補うと、結局は、何も残らない。苦しい生活には変りないのである。それに、新田は、水よけの為の普請の必要があり、その手間もばかにならない。馬や農具の半分は、庄屋から貸りている有様だし、自立しているとは言え、自立下人とも言うべき存在だったのである。

「大丈夫だよ。おら、観音様に願、かけよったになあ。」

と、つとめて明かるい声で、お種は言った。みの八を元気づけるというよりも、自分自身に言いきかせるようにであった。

みの八とお種の間には、年をとるまで子供が出来なかった。この言い方は、正しくない。お種が、みの八と一緒になる時、人々は、口々に、お種は、いい体、しちょるから、いいやや子が出来るじゃ

ろと祝福したのだった。お種は、十六でみの八に嫁いだ。たて続けに五人の子供を生んだ。だが、どういうわけか、各れも死産に終った。五人目を孕んだ時、今度こそはと祈る気持になって、近所の人のすすめることもあり、安産の祈禱をし、厄払いをした。だが、その子もまた、真黒の、ひからびたミイラのような子供だったのである。虚空をつかんだ小さな手を見、まだ自然の恵みを、少したりとも受けていないうちに、すでに黄泉への旅を歩む我が子をこうも見続けては、二人の間で、子供が欲しいという言葉は、禁句の一つになったのも無理はない。そして二人は、自分達の体の中に、魔物が巣くっているに違いないと信じこみ、互に肌を合わすことをしなくなった。みの八三十一才、お種二十四才であった。

それからというもの、みの八は、新田開拓にやっきとなった。男盛りの体をもてあますかのごとくである。

或る晩、飲めない地酒をのんで、酔って帰ってきたみの八は、寝乱れたお種の陽にやけて、赤銅色の太股を見て、思わず、今まで抑えてきたものが、一度に湧れるように、身体が熱くなっていくのを感じた。思わず触ったお種の足は、固く引きしまり、油をひいたように滑らかだった。

「おたね！」

みの八は、お種を抱きしめ、体臭をむさぼりかいだ。枯草のような、香ばしい匂いがする。

「もう、どの位お種を抱かなかったじやろ。仏様に、願かけたわけじやなし……」

小一時間たっただろうか、汗にまみれた、みの八は、疲れ切った様に、お種から体をはなした。駄目なのである。焦れば焦る程、体は、何かに反発するかのように拒絶してしまう。疲れているのか、

酔っているのか。お種も同じだった。みの八の執拗な愛撫も、昼の重労働の為、ぐっすりと寝こんでいて気付かないお種の太股は、みの八が近づくと、ぴたりと閉じて拒絶するのである。

「なむまいだ、なんまいだ。やっぱり、おらの体にゃ、魔物が巣くっちょるだ。のろわれちょる！」

今までの酔いもさめ、興奮のさめ切った身体を土間に運び、頭からざあざあと水をかぶった。そんな事があってから、みの八は、前にも増して働き続け、お種もまた、あの晩のことを知ってか知らずか、暑い夏にも、寝乱れるようなことはなかった。

お種二十七才の春の日であった。気だるい、夢を見ていれば一生見続けられるような日だった。かげろうの立つなかを、お種は、麦の刈入れのすんだ寸暇を借んで、上中島村の庄屋の家へと急いでいた。庄屋の名は、甚助と言った。大豆の種を少し分けてもらおうと、出掛けたのである。

甚助の家は、みの八、お種の新田のある竹ヶ鼻からは、かなり離れた上中島村にあり、村人達はその辺り一帯を、甚助の名を取って、甚助屋敷と呼んでいる。

庄屋の甚助は、上中島村の人なのだが、竹ヶ鼻村の商人と計って、竹ヶ鼻村の堤防外の土地、十町程を新田として開拓することに決めた。その内の五町を、みの八の様な水呑百姓、六戸、二十一人に、集団耕作の、村受新田として開拓させていたのである。

このようにして、甚助は、無高だった者を、地借百姓にして自立させ、移住させていた。そして、高持だったよね七一家を、五人組の組頭として、監督に当らせていたのである。無高の二十一人は、

名目上は、高持になったのだが、現実は、無高下人と言ってもよい程、貧しかったのである。
この様な人々を、小前百姓と、江戸初期には言ったが、後の寛文十三年、(一六七三)の、分地制限令で、このような狭い田を、分地して分与える事が禁止され、この様な形態の百姓は、水呑無高として、組入れられるようになってしまったらしい。

「おゝ、お種か、何の用だ。」
声をかけたお種に答えて、奥から出てきたのは、でっぷり太り、懐手をした庄屋の甚助であった。
「へェ、ちょっとばかり、大豆の種を分けてもらえんかと思うて……」
甚助は、お種の体を、好色そうな目で、なめるように、上から下まで眺めまわし、
「なんだ、そんな事かいの。遠慮はいらんで。いくらでも、持ってくがいい。」
といい、下人に大豆の種と、卵を少々持って来るように命じた。
お種は、あっさりと甚助が承知したのを見て、今日、来てよかったと思った。いつもの甚助なら、なんだかだと文句をつけ、じらしにじらしてから分けてくれるのに、今日は随分気前がいい。何か良い事があったからに違いない。お種は喜んだ。
庄屋の甚助は、裏庭に沢山の鶏を飼って卵を産ませていた。毎朝、下人達は、その卵を集めてくるのだが、甚助は、それを、自分でひとつひとつ数えながら、その数を帳面に記させていた。万が一、その卵を隠し持っている者を見つけようものなら、大変な剣幕で、折檻するのであった。毎朝、必らずと言ってよい程起るこの卵騒動を、村人達は、誰一人として知らぬ者はなかった。その大事な卵ま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

で、大豆の種と共にくれるというのであるから、これは、余程気嫌の良い証拠であった。下人が持ってきた大豆の種と、卵を渡しながら、甚助は、

「お種、お前、相変らず良い女だで。ほんな木綿の着物を脱いで。綺麗な着物に着がえれば、好きなだけ男が出来よるで。」

と言った。

「とんでもねえ、おらなど、もうばあさまぢゃ。」

といいつつ、お種は、庄屋のくれた卵と種を、両手に大切そうにおし頂いた。

「家の息子の甚八な。あいつ、お前に気があるらしいんで。」

と、うすら笑いを浮べていう甚助を見ながら、お種は、精薄なので、いつも口をぽかんとあけている甚八の顔を思い描き、ぞっとした。そんなお種の両手を、甚助は握った。

「あれ、庄屋さま、いけないで。」

と、手をふりほどこうとするお種に、そうはさせじと、

「ほら〳〵、お種、卵が割れるで。」

執拗に、両手を着物の八口(やつくち)の中に入れようとする甚助を、体をくねらせて避けたお種の手から、卵が一つ、二つ、こぼれ落ちて割れた。

「あゝ、卵が……」

落ちた卵は、お種の足に黄身をとばす。

「ほれ見たことか。卵は、そっと握っておくもんじゃ。なあ、良いだろうお種。あんまり厭がると、

卵は、皆割れてしまうで。亭主に食べさせたくはないんかの。お種。」

そう言われると、お種は困ってしまう。卵など、此処ずっと食べてはいない。みの八にも食べさせてやりたい。ここで甚助をこばめば、卵ばかりでなく、大事な、大豆の種までもとり上げられてしまうことはわかり切っていた。でも、この太った庄屋に、肌をさわられる度に、体中虫酸が走るのだった。なおも体を撫でまわし、舌なめずりしていた甚助は、たまらなくなり、なおも逃げようとするお種の体を抱きしめて、頸筋に口唇を押しつけようとした時、どこからともなく、ピューンと飛んできた一つの卵が、庄屋の顔に当って割れた。はっとして、手のゆるんだ瞬間、お種は、甚助の腕の中から逃れて、一目散に庄屋の家から走り出ていた。背後では、大声で下人達を怒鳴りつけている甚助の声が聞えていた。庄屋の家から、かなり離れた川の辺りまで、夢中でかけてきたとき、お種は、肩で大きく息をして、道の袂にうずくまった。やがて、胸の動悸がおさまるとクックッと肩をふるわせ笑いはじめた。

庄屋の、卵まみれの顔が、おかしくてたまらなかった。しのび笑いは、段々大きな笑いに変り、立上ったお種は、大声で笑い始めた。今しがた受けた恥辱を、吹飛ばすかのように、川に向って笑いころげた。その時、後の叢で、カサッと音がした。笑いを止めて、振向いた叢は、相変らず、何事もなく見える。お種は又、笑い、笑いながら、体が汗にまみれているのに気づいていた。どこか近くの水で、さっぱりと汗を落して家へ帰ろう、そう思って歩き出した。

問もなく、葦の繁みが目に入る。格好の灌木もある。お種は、あたりに人の気配のないのを確かめると、葦の繁みに入っていった。卵と種を、安全な場所にそっと置くと、着物を肩から滑り落とし、

灌木にかける。都育ちの女達の、白い肢体とは比ぶべきもないが、赤銅色のたくましい腰や、健康そうに輝やく二つの大きな乳房を持つ女盛りのお種の裸身は、大自然の中でも、決して見おとりはしない。むしろ、お種の裸の方が、大自然そのものに見える。都の女達は、夜の灯明の下で見て美しいのであって、白昼、このような所で美しく見えるかどうか。

その時また、カサッと葦のゆらぐ音がした。水の中のお種は、まるで無邪気な子供のように、流れに身をまかせたり、水に身体を浸したかと思うと飛上り、両手で、河面をたたいたりしながら、たわむれている。勿論、葦の繁みから、のぞき見ている男がいるなどとは気づくよしもない。

水から上がったお種の体から、水がはじけて乾いてゆく。健康の証拠だ。さっぱりしたお種は、庄屋とのいまわしい出来事をすっかり忘れてしまっていた。着物をとろうと手をのばすと、横から、すっと手が出て、着物をとった者がいる。はっとして見ると、口をぽかんとあけて、涎を滴している一人の男が、お種の前に立っていた。庄屋の息子の甚八である。

「庄屋さんとこの坊ちゃま。」

お種は、あわてて両手で体をおおった。甚八は、幼少の頃から知恵が遅く、何を教えても覚えない。やっとのことで鍬の使い方を覚えたと思えば、日一日田を堀返し、使いものにならない程、荒してしまうかと思えば、畦にわざ〳〵鍬を入れる始末で、庄屋もほとほと愛想をつかしていた。

「お種、おらだよ。卵をなげたのは、おらだ。ちゃあまに触わらせたんだに、おらにも触わらせてくれんか。」

と、よくまわらない舌で、お種を抱こうとする。

「坊ちゃま、何するで。」
後は、甚八の手で口をふさがれ、声にならない。お種は、近づいてくる甚八の胸とのどに、力一杯手をあて、お種の体を吸おうとする甚八を防いだ。毎日の野良仕事で、お種の腕力も普通の女よりは、はるかに優れている筈であった。だが、馬鹿力とはよく言ったもの、甚八は、ぐん〳〵押してきて、葦の繁みのはずれまでくると、濡れた草地にお種をたおした。
「温ったけえな。気持えーな。卵は、おらがぶつけたんだで、お種。」
口を吸おうとする甚八を避けて、左右に首をふっていやがるお種の上に、涎を、だら〳〵と滴した甚八は、ウェー〳〵と、異様な叫けび声をあげ、左手でお種を押さえつけ、右手で腰を撫でまわす。ふと甚八は、お種の体を見たいと思った。体を離した瞬間、お種は、渾身の力をふりしぼって、甚八をはねのけた。虚をつかれた甚八は、泥の中に、もんどり打ってころんだ。お種は、川にそって逃げた。葦で傷ついた背中から、血が吹き出していた。
「助けてやったのは、おらだで。卵を投げて、ちやあまから助けてやったによ。」
口から涎と泡を飛ばし、水に濡れてまとわりつく着物を脱ぐと、お種を追っていった。所詮は、男と女、それにまして、甚八は、阿呆だ。その執念が、走らせている。お種は、足を砂利にとられ、痛めてしまった。足に、手をからませようとする甚八を、両足で飛蹴し、土手の上に、はい上がろうとする。甚八は、お種の足をつかみ、引づり下ろそうとする。必死にはい上がろうとするお種の爪は、血まみれになり、それでも歯をくいしばって逃れようとした。
数メートルの土手が、何んと高く続いているように見えることだろう。やっとの事で、両手が土手

の上に届いた時、甚八の手が太股を撫でた。尻を下からつかむ。ぞくっとしてお種が、体を動かした時、土手の土が削りとられ、甚八は、滑り落ちそうになった。あわてて、お種の尻に爪を立て、滑り落ちないようにする。土は、尚もくずれて、甚八は、ごろ〳〵と下へころげ落ちていった。お種の豊かな脹みから三筋の血が、すっと陽に映えて光った。

この辺りは、輪中の中とは言え、危険な場所なので、本百姓も放置したまゝの場所であった。水呑百姓には、入合(いりあい)を認めなかったので、百姓達の姿は、この辺りにはない。お種は、よろ〳〵と、土手の上にはい上った。人の気配に、はっとして顔を上げると、そこには、にた〳〵笑う甚八の顔があった。お種は、側の泥田の中に逃げこむ。股まで入込む。足をとられながら逃げるうち、下半身は泥まみれとなり、たくましい二本の柱の中心の漆黒の部分も気にならなくなった。甚八はなおも追ってきて、裸の体でお種に迫った。

「畜生、ちゃあまにやらせたみたいに、おらにもやらせろ。」

甚八は、追いついて、後から、お種を抱きしめた。髪を引っぱり、ズブズブと泥の中に押えつける。お種は、その時、何も判らなくなった。

甚八は、お種のぐったりした体を、畦に横たえた。泥と血で汚れたお種の体から、異様な臭気が漂った。甚八はその臭気を、いい匂いだといい、その泥と血をなめまわした。死んだ死んだと手をたたき、喜こぶ甚八の姿は、暮れかかった畦に、次第にくっきりと黒い影となっていった。

その晩、みの八は、お種の遅い帰りを案じて捜しに出て、見つけられずに帰ってくると、土間の隅の方に、うずくまっているお種を見つけた。虚ろな目をして、放心しているお種に、みの八は、何も

問わず、水を汲んできて、体にこびりついた泥と血を拭いてやるのだった。お種は、ぼんやりと、されるが儘になっていた。みの八は、そんなお種を、抱きあげて、筵の上に寝かせた。その時も、お種の虚ろな表情は変わらなかった。

翌日、お種が目を覚したのは、もう日も高く昇ってからだった。隣りの床は、空だ。みの八はもうすでに田へ出ていた。いつもなら、二人で、ねむいのを励まし合いながら出ていくのに、今日は独りで出て行ってしまった。お種もあわてて野良に出る。みの八はすでに、田の荒起しを始めていた。お種は、昨日、みの八が、体を拭いてくれながら、自分に言いきかせるようにつぶやいた言葉を、思い出していた。

「あの地蔵さまとこの、崖から落ちたんやろ。あすこ通る時きゃ、気(きい)つけんといけん言うただろうに。崖から落ちたんや、痛かろう。崖から落ちたではのう。」

甚八との事は知らないのだ。安堵するそばから、ところ〳〵まだついている泥や血を見ると、いまわしい事柄が思い出されてくる。知らないわけがない。この体を見れば、すぐ誰かに乱暴されたとわかってしまう。それに、お種は裸であったのだから、不審に感じたに違いない。お種の心は、乱れた。お種は、みの八が、自分の事を、どう思っているかが気になってしかたがなかった。だが、みの八は、何も聞かない。お種は、ほっとした。

仕事の手を休めて、額の汗を拭いたみの八が、突然、お種に声をかけた。

「お種、大豆の種は、どうしたい。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.